

新・21世紀への道 <その5>

栄地区ふるさと菜園 s

車社会の進展により、地方では郊外型の大型店舗に人が集まり、旧来の徒歩圏内の商店街が衰退した。一方で、平成の大合併を経て、都市機能の一極集中の弊害も認識されているようだ。本シリーズの4回目は、国際耕種が取り組んでいる国内の地域活性化の事例を紹介する。

筑波研究学園都市（以下学園都市）がある街として知られる茨城県つくば市は1987年から2002年までに合併した6町村が母体になっている。市は学園都市開発時に計画された中心市街地や新設の鉄道沿線を中心に発展し、現在も人口増加傾向にある。一方、合併以前の町村の中心地であった市内の8つの「周辺市街地（通称 R8：リージョンエイト）」は人口減少・若者流出・高齢化率上昇の傾向にあり、地域活力が低下し、コミュニティ維持が課題とされる。こうした現状から市は住民主体の地域活性化を促すため R8 各地に住民組織「周辺市街地活性化協議会」の設立を支援した。さらに、民間活力を呼び込む試みとして「つくば R8 地域活性化プランコンペティション（以下 R8 コンペ）」も開催した。

つくば市は国際耕種が20年以上、JICA 筑波の農業研修を実施してきた地域である。R8 地区が元来、農村地域の中心として発展してきたと考え、海外の農村やつくば地域での経験を活かしつつ、農業を軸とした地域活性化案が提案できると考え、2020年に R8 コンペの「地域ぐるみ活動創成コース」に応募した。コンペでは中心市街地に近接しながらも農地に囲まれている R8 地域の特性に着目し、農業体験をとおして中心市街地や鉄道沿線の「新住民」と R8 地域の自給的「協力農家」が交流するプラン「つくばふるさと菜園事業」を提案し、審査の結果、採択された。

プラン採択後は対象を R8 地区の中の栄地区に絞り、栄市街地活性化協議会（以下、協議会）の役員など地元の方々と議論し、準備を進めた。協議会役員は現役を引退した 60 代後半の方が多

く、当初はこの世代の中に、地域の「協力農家」がいるだろうと考えていた。しかし、栄地区のこの世代は、ほとんどが農業を継がずに会社勤めだったようで、地域の農業離れは意外に進んでおり、想定していた「協力農家」に代わる交流の担い手の確保が課題となった。しかし、さらに議論を進めると、この世代には、子供の頃から親の農作業を見たり、手伝ったりして、農村的生活経験と農家的感覚をもった人も少なくないことがわかった。そこで、そのような方々に地元サポーターとして参加してもらい、栽培技術は国際耕種が中心となって提供するプラン「栄地区ふるさと菜園 s（さいえんす：以下菜園 s）」を立ち上げた。

菜園 s は家庭菜園教室を国際耕種が実施し、参加者は筑波山を望む美しい田園風景の中にある菜園で野菜作りを体験できるプログラムだ。週末は地元サポーターにアドバイスも受けられ、彼らとの交流により地域の文化や歴史にも触れられる。国際耕種の海外経験を活かし、外国人も受入れ、国際性豊かな学園都市の性格も反映させた。

活動は3年目に入った。毎年50名ほどの参加者の中にはリピーターも多い。地元サポーターも活動を楽しんでおり、ほとんどが、3年間継続している。菜園 s を通じて、ささやかだが、息の長いコミュニティ内外の交流が生まれている。市街地活性化に農業を活用するのは逆説的かもしれないが、R8 地域の特性を活かした取り組みとしての有効性は示せたと思う。菜園 s がコミュニティの活動として長く継続していくためには活動の担い手の強化や世代的な広がりも必要で、課題は多いものの、菜園 s の場を利用して協議会が「朝市」を開催したり、今年からは協議会が菜園 s の実施主体となる体制ができたりして、地域ぐるみの活動としての歩を進めている。



参加者（右）に支柱の組み方を教える地元サポーター（左）